

特別活動研究部

1 研究テーマ

「明るい未来を切り拓く子どもを育てる学級活動の在り方」
 ～ 話し合い活動における合意形成、意思決定の望ましい在り方とその支援 ～

2 研究内容について

学級活動のそれぞれの学習過程における、合意形成や意思決定に向かう子どもの具体的な姿を明らかにし、その姿に迫るための教師の支援を探ることを研究の目的とする。学級活動のそれぞれの学習過程における合意形成、意思決定に向かう具体的な姿を、実践提案、授業研究会等を通して分析・整理していく。さらに、合意形成、意思決定のための教師の支援について、どのように有効であったかについて研究していく。

3 研究方法

- (1)市内全小学校から研究会員を募集する。会員は低学年部会、中学年部会、高学年部会のいずれかに所属し、研究を進める。
- (2)原則として月1回の研究会を開催する。基本的には部会で研究を進め、必要に応じて全体会を行う。
- (3)研究主題に沿った提案資料をもとに研究協議する。授業研究会では、研究授業をもとに研究協議を行う。また、部会ごとに助言者を依頼し、指導を仰ぐ。
- (4)講演会を通して研究を深めるとともに、特別活動の指導について研修する。
- (5)研究大会では各区の研究を基に研究協議し、特別活動における指導力を高める。
- (6)各部会に研究推進委員を選出し、研究会の運営・推進、研究内容の分析やまとめ、研究紀要の作成等を行う。
- (7)毎月の研究会と並行し、主に経験年数が5年までの会員を対象に役員による「フレッシュ講座」を開催する(16:00～16:45)。

4 年間活動報告

日程	内 容	研究会の持ち方
6/10	総会・研究計画提案	全体会
7/1	課題別研修会	低・中・高・調査部会
8/20	講演会	全体会
9/9	実践提案①	フレッシュ講座①
10/7	実践提案②	フレッシュ講座②
11/4	実践提案③	フレッシュ講座③
12/2	授業研究会(低1・中1・高1 計3 授業公開)	低・中・高部会
1/13	実践提案④	中止
2/10	※第二次教育研究大会(中区・西区)	Zoom 全体会
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: 80%;"> <p>【中区・西区 研究主題】「みんながいたからできたよ！」 ～子どもの身のまわりの気付きから生まれる、活動をつくる指導の工夫～ 自分たちだけの中西特製フルコースをつくりだせ</p> </div> <p>学校数が少ない2つの当該区が共同に研究していくことによってより多くの意見交換ができ、深い学びにつながった。また、研究会を1つのクラスに見立て、「特製フルコースを作る」というストーリーで、会員の一人ひとりが役割をもって研究を推進し、楽しみながら主体的に研究できたこともすばらしかった。</p>		
3/3	研究のまとめ	Zoom 全体会

・授業研会は体育館でライブ映像での参観

・区部長会・推薦委員会は文書にて案内

5 成果と課題

研究会では、合意形成・意思決定に向かう子どもの姿と教師の支援の検証や分析を行った。

昨年度までの研究に加え、合意形成・意思決定に向かう子どもの姿のとらえ方が一層明確になり、教師の支援の種類や指導のポイントについても明らかになった。

＜合意形成に向かうために有効であると考えられる教師の支援＞

- ・ミニ学級会などの話し合いの経験を積み重ねることができるようにする
- ・どのように合意形成したか記録し、掲示する
- ・各教科で学んだ話し合いの仕方を掲示する
- ・どのような合意形成をしたいか話し合い、確認する場を設ける。
- ・思考ツールを用いて話し合う
- ・話し合う視点を整理する助言を行う
- ・ペアや少人数での話し合い、活動、情報の共有をする場や時間を設ける
- ・「助言想定表」を作り、適切な助言に努める

＜意思決定に向かうために有効と考えられる教師の支援＞

- ・活動や日々の生活の振り返りを記録する
- ・動画や写真など自分たちを客観的に捉える資料を提示する
- ・実際にやってみる場を設ける
- ・具体物を用いて考えることができるようにする
- ・アンケートを実施する
- ・板書を工夫する（可視化、操作化、構造化）
- ・身近な人の話を聞く（学校ボランティア、上学年など）

一方で、今年度はこのコロナ禍の中、大変に難しい研究会運営となった。とりわけ特別活動では、子ども同士のかかわりを前提とする教育活動であることから、実践すること自体が手さぐりの一年間だった。そこで「コロナの中で特活ができるのか」という多くの会員の問いに答えるべく、7月には予定のテーマを変更して課題別研修会を行った。学校再開から間もない時期ではあったが多くの会員の参加があり、ニーズの高さを感じた。

その後の講演会や実践提案を内容とした研究会にも多数の会員の参加があった。むしろコロナ禍だからこそ特別活動の意義を再認識し、勉強したい、研究を進めたいという思いが高まったと言える。それは9月以降の実践提案でも同様であり、各提案者がそのときどきだからこその実践に心を砕き、それをもとに協議を深めることができた。

授業研究会（12月）では、リアルタイムの授業を参観できることを大切にしようと考え、研究会当日の授業映像を有線で体育館につないで上映し、そこで参観者で見合うようにした。当該教室には記録者のみの最小限の委員等が入るように工夫した。有線だったため、映像が途切れることなくクリアに見ることができたが、子どもの声は聞きづらいときがあった。また、有線で上映するための機器を業者からレンタルしたり、会場校でのコードの設置等を前日から準備したりするなど、運営面の課題もあった。

第2次教育研究大会（2月）では、中区、西区研究会による合同研究発表を行った。緊急事態宣言のもと、本研究会としては初のzoom開催となった。大きな支障もなく実施できたが、無料アカウントによる人数制限に対する懸念があった（今回は100人を超えなかったため、進行が滞るなどの問題は生じなかった）。

くり返しになるが、今年度は運営面での難しさを痛感するとともに、学校教育で果たす特別活動の意義を再認識した一年だった。もっとも来年度も引き続き同様の研究会運営が予想される。そこで、各研究会がzoom等のリモートで同時開催しても円滑に進められるよう、例えば通信状況や人数制限などについてよく理解しておく必要がある。合わせて研究会組織間のさらなる情報共有なども一層大切になると考えている。